日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話｜（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

92.4.10 No. 3572

加速度的に深化する動労の闘い

東日本への波及は必至

JR総連革マルの最後のあがき

西、東海、九州労「スト」の意味するもの

旧動労系の東海・西・九州労が、先月三一日から「四八時間スト」を行った。

これは昨年の西日本からはじまったJR総連の分裂がついに行きつくところまで行った証左に他ならない。

「スト」の目標を、①賃上げ、②安全問題、③不当労働行為、としているが、昨秋段階での、会社側による動労革マル排除―大卒運転士登用＝血の入れ換えが根底にあることは明らかである。

この間、国鉄労働者を塗炭の苦しみに追いやり、十万人首きりをはじめとした分割・民営化を率先協力してきた動労革マルの最後のあがき声を、この「スト」に聞くことができる。

しかしながらJR会社側にとって、この労務政策の変更は、その根に分割・民営化の破産を背負っている以上、もはやその関係修復は不可能となっているのだ。

ここに一企業一組合を標傍し、「わが世の春をおう歌」してきたJR総連革マルの意図は木っ端微塵に粉砕され、走狗として煮られる運命をきたしたのだ。

なぜ分割・民営化五年目にして、こういう事態が発生しているのか。

「すてないでくれ」と哀願するJR総連革マル

それは一つには言うまでもないことであるが、分割・民営化することによって、長期債務の償還をするとしていたものが、バブル崩壊によって完全に破産したということであり、もう一つは清算事業団闘争をはじめとした不屈に国鉄労働運動の旗を守り高揚させてきたことが、JR当局―JR総連による労務政策を破綻に追いこんできたということなのだ。

要するに、この修復不可能な構図はさらに進むしかない。

JR総連革マルが、今まで行ってきた差別・選別・配転をはじめとしたありとあらゆることが、今度はその血ぬられた自身があびる番となったと言うことであり、因果応報なのである。

今回の「スト」は、会社側から「　　」を突きつけられたことに、「すてないでくれ」と哀願したものであり、ストライキの本来の意味である「要求の実現・団結の強化」とは次元の違うところで実施されたものに他ならない。

しかし、この「スト」の結果は、JR総連の崩壊をさらに促進するものとしかならなかった。

東日本だけが「順風」？

今回の「スト」は、JR総連として行ったものである。東日本だけが「順風」であるから設定しなかったなどということが通用すべくもない。

これによって更に対立は深化し、必ずや東日本にも波及を開始し（その兆候はすでに明らかになっているが）、崩壊を招くことは必至である。

分割・民営化の破産は東日本として、同様の直撃を受けるのであるから当然のごとく、その日はやってくる。

スト以降百名が脱退・西労

また西日本だけは一日目で「スト」を中止してしまった。その理由は、JR西労内部の意見の対立であると言われている。事実、「スト」以降、百名単位での脱退が相次いでいる。

東海労は一本の列車を止める力もないことをあらわにしてしまった。結局「スト」はさんたんたる結果に終わったのである。

「JR体制」にトドメを！

一方で、会社側のテコ入れによって、JR連合が旧鉄労・鉄産労を中心として、この五月末にも発足する。

いよいよ本格的に、「労務政策の変更」がスタートするのだ。

JR総連を切り捨て、新たに御用組合を再編しようというのだ。

国鉄労働運動を巡る情勢は、最大の転機を迎えようとしている。

その意味において、清算事業団闘争をはじめとして闘う側の体制が今こそ求められている時期はない。

われわれにとって反転攻勢の絶好のチャンスが到来している。

「JR体制」にトドメを！

☆新住所・電話番号のお知らせ！

住所　千葉市中央区要町2―8
〒260（4月1日から）
電話　本部　043（222）7207
協販部　043（227）7833
カナメ　043（227）6832
FAX　043（224）7197
電話は4月29日からです。